# 〈資料紹介〉翻刻『潤色江戸紫』（下）

翻刻の会

一、底本には関西大学図書館の七行九十九丁本を用いた。

二、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠った。

1　本文は文字譜を手掛かりにして、適宜改行を施した。ただし、道行・景事の類、会話の途中等では改行しなかった。

2　各丁の表・裏の終わりは、丁数の数字とオ・ウの略号を（　）で示した。

3　仮名は現行の字体に統一した。ただし、感動詞、送り仮名、捨て仮名の類以外の、本文中の「ニ」「ハ」「ミ」は「に」「は」「み」とした。

4　漢字は、一部の異体字を除いては、原則として通行の字体に統一した。

5　漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。

6　特殊な略体、草体、合字等は現行の表記に改めた。

7　畳字は、平仮名は「ゝ」、片仮名は「丶」、漢字は「々」に統一した。ただし、「〳〵」はそのまま残した。

8　文字譜の類はすべて採用し、本文の右傍の適切と思われる位置に翻字した。

三、本文の翻刻は、次に掲げる翻刻の会（学部学生の研究会）の会員によってなされた。

芦野陽子、浦野洋紀、太田楓実、釜丸祥、小林芙美、酒瀬川なおみ、柴田紘孝、中村梨恵子、西有幸、日當真心、布施あかり、水田千尋、横山知尋、吉村仁志。

節付、改行及び本文の最終確認は山田和人が担当した。

（山田和人）

備考

本書は『世話浄瑠璃大全』（精華書院、一九〇七）に所収されているが、翻字の誤りを修正し、節付も補い、改めて底本に忠実な翻刻本文を提供できるようにしたことを断っておきたい。

。源次兵衛が詮義を致す。立帰つてお待なされて下されい。ホヽ平太は帰つて待もせふが。纔蝋燭。（50ウ）一挺の間に詮義なされて。若又松竹梅の有所しれざる時には。ハテ盗マぬといふ御主人への申訳。躬に切腹させまするとと。立派にいへど目は涙。ハヽヽヽこりやさつぱりとした御思案。それ迄平太が預り帰る此ニタ品。嫁のお雛が人を殺した証拠の小袖。詮義の手詰メの此挑灯。蝋燭がたち切ル迄に。一軸の詮義が済ムか。吉三が切腹お仕やるか。二つに一つの御左右を必待申スと。主のけんいち一走に。座敷をけたてゝ稲垣平太。家来もしどろに立帰れは。

嫁に取付キ源次兵衛。コリヤお雛。吉三が難義を救んと。命を捨る。おことが深切悦ぶぞや。イヱ申親仁様。お雛の志をかんじ。平太殿にはいはざれ共。今の小袖の血は。（51オ）ヲヽサ其義はよく知ッて居る。身共を迎に来りし。角介が腕の生疵。何ゆへと尋たれは。夜前お雛が供をして帰る時。脇指が鞘走てといひしゆへ。嫁が上着に付たる血リは。扨こそとがんづきながら。今のごとくゆつて平太をかへしたは。深き子細有ての事。先刻湯屋の伝七が申スには。日本堤の樋守与五蔵といふ者。彼ノ一軸の詮義の手筋を。注進せふとの内意なれは。身は衣紋坂へ立越ェ。様子を聞届て帰る程に。其間に吉三郎は。お雛と祝言の盃せよ。ハア畏ッたと申たいが。纔蝋燭一挺にせまつた私が命。盃しても詮ンなき事。サアそこを思ふて。媒の平太へは沙汰なし。かゝる期に望ンでも。御主人よりお指図の縁組なれは。（51ウ）捨置カぬが忠義の一つ。あの二階の燭台に立テ置し蝋燭も。此挑灯の蝋燭も。同じ会津の巻掛なれど。明りを立るか名を流すか。思へは。はかない身の上と涙紛ず咳払ひ。お雛吉三も諸共にしばし詞も泣居しが。其与五蔵と申者には。昨晩日本堤にて近付に成おいたれは。私がつい一ト走リと。立上れは勝手よりア、是々和子。其お使ィには此うばが参りますと。小裙りゝしく一ト腰さいて

立出れは。フウ扨はうば。始終の様子を聞此使ィを望ンで出たか。ハイ。湯屋の伝七方迄参ッて。与五蔵とやらを同道して帰りませふ。ホヽでかした〳〵。吉三が為には乳房の母くるしうない。源次兵衛が妻じやといへ。さすれは与五蔵が。かるゞ〳〵しき使ィとは思ふ（52オ）まい。五松家の御紋付此挑灯を持ッて行ケ。其蝋燭も。平太が持ッて帰りし挑灯も。二階の燭台の蝋燭も。皆吉三郎が命の縮る火時計と心得。必油断すな急げ〳〵。合点でござります。コレ和子。わしが戻る迄早まつて下さんなと。養君の一生懸命。心の弓張リ挑灯に道を照させかけ出せは。

詮方泣ク々嫁のお雛。サア申吉三様。二階の仏間へ。早とく〳〵と。いふも諾もくもり声。二人は亭へ。父は障子を。さしよせ。〳〵て。諸天善神。躬が難義を救せ給へ。御威光増益。南無妙法蓮華経。ほうれんげ経。なむ妙法れんげ経南無妙。法蓮華経。祖師日蓮大菩薩。度々の御難にあはせ給ふも。此御ン経を。普世界の一闡提（52ウ）に。弘ん為の。御方便也なむ妙。法蓮華経りんの声さへ。哀げに。法花の題号同音に。お七は下女の杉諸共やつす。姿のこきん綿。裏間口にたゝずめは。それと聞しる吉三郎。二階の障子押ひらき。マアお七かお杉かと。物いひたげに見れは見かはす顔と顔。ちら〳〵ちらめく燭台の光リにお雛が袖覆ひ。ア、心なの夜ルの嵐。蝋燭の早ふたつのがわしや悲しい。風のまへの灯と倶に心の消入時しも。歌経よんで姫ごぜの修行者。我ヵ夫の災難を遁るゝ様に。お題目を唱てと。頼ムをせいして吉三郎。イヤなふお雛。かゝる災は寺に有ル内。上人様の目をくらまし。色に迷し仏罰と思へは。御ン経の功力も有ルまじ。（53オ）修行者早ふいんで下されと。それと明していはね共。名残は尽ぬ暇乞。お七は悲しさつゝみ兼。コレ申吉三様。其災難は皆わしゆへ。おまへが恋しさ床しさに。きのふから蓑輪の伯母様ンの所へ行。それから直ク に今爰へくる道で。おうは殿

に逢ィまして。聞ケは今ン夜御祝言も有げなし。あの燭台の蝋燭限リのお命とや。せめて此世の暇乞にお傍へ行たい顔見たいと。歎けばお雛も倶涙。サテハお七殿かいな。わたしは雛でござんす。吉三様ンとこな様ンはよく〳〵深い縁なりやこそ。かゝる所へござんした。ちやつと爰へきて下さんせ。イヤ親仁様の手前が有ル。お七必おじやんな。アゝ何ンのいな。わたしはそこへ（53ウ）いかいでも大事ない。御祝言のお邪魔であろと。どこやらぴんとはね題目。

杉は紛し鈴打ならし。妙法れんげ経。悋気しつとは姫ごぜの習ィと思し明らめて。赦し給へや南無妙。コレ杉そりや何いやる。悋気する気はなけれ共。お寺で別レてそれよりは文おこしても返事もなく。今宵の様な悲しい訳をおしらせないが恨しい。御心底也なむ妙。法蓮華経けふは。いかなる日也けり。座するにも安からぬ父の安森源次兵衛。仏壇にそなへた る花瓶の松に鶴亀取添。三方に捧出。此鶴亀を仮の島台になぞらへ。夫婦の盃さするのが身の祈禱。よき折からの修行者。（54オ）祖師上人。龍の口の御難の段の。歌題目を頼入ル。それを千秋万歳の謡と思ひ祝言の。盃早ふとすゝむれば。

お七は猶もかきくもり。燭台の蝋燭限リのお命と。思へは悲しいお雛様ン。ヲゝ道理お七上郎。あなたの難義を身に受ケて。わしから先キへ死たいとくどき歎けば源次兵衛。ヲゝ嫁。悲しうなふて何ンとせふ。若も吉三郎切腹するに極まらば。是迄のうすき縁と明らめたがよいぞお七。イヤサ七面にそなへし。此御酒徳利が長柄の銚子。お雛。洗米の土器に。一つ受ケて吉三へさしやと。父が銚子を取上れは。嫁は泣々土器に涙たゝゆる憂思ひ。外には一人が歌経のふしもしどろに。妙法蓮華（54ウ）経。祖師上人を龍の口に引出し。やがて太刀取後に廻り。御ン首討んと振上る。アレあれを聞ケ。日蓮上人さへも。時の災難は遁レ給はず。イヱそれは応身権化の沙汰。鶴が岡の神力によつて助かり給へ共。今吉三郎が身の云訳は。腹

きらねはたゝぬ〳〵。何ンとしたかうばは遅し。あれ蝋燭も半過キ。杉もお七も気をあせり。ア、是吉三様短気な事なさんな。アレ〳〵向ふへおうば殿の挑灯が。ヲ、実も〳〵。必躬早まるなと。夕闇照す弓張挑灯ひつさげてかけ戻れば。ヤア〳〵うば。帰りしか。なぜ与五蔵を同道せぬ。サア折あしく他行いたして。ヱ、残念や宿におらぬか。ハアはつと計に皆々力をお乳の人。息（55オ）切レすれは用水の桶にすがつて掬ひ呑。是迄也と源次兵衛が眴に。元来覚悟の吉三郎。脇指ぬく手に嫁は取付待タしやんせ。まだ蝋燭はきへぬ〳〵。コレ和子早まるまいぞ。かゝる様子を云置イて戻つたれば。与五蔵が追付見へる。かんまいてお雛様ン。其手を放して下さんすなとお七も杉も叫び泣。イヤ〳〵放せ。イヤ放さぬと二階に二人ンが争ふ半。ヲ、イおいと大だらぼつ込。身軽にかけくる樋守与五蔵。挑灯の御紋を目当に追かけましたが。只今衣紋坂へお出なされし。源次兵衛様の奥様はこなたか。ヲ、与五蔵殿か待て居たと。顔見合て互イに恂り。ヒヤアうぬは身が女房お（55ウ）きそではないか。こな様ンは京で別レたこちの人。ヲ、夫ト共しらず。源次兵衛殿の奥様呼り。不義の天罰思ひしれと。ずはと抜イて切かくる。かいくゞつてコレ待つしやれ。不義でない様子が有ルと。用水手桶ではつしと受れは。又振上る短気の抜身あしらひ兼て見へけれは。コリヤ〳〵与五蔵。此源次兵衛が女房と偽り。名代に遣したは。其方を重んじたる身が計ラひ。シテ又女めが爰にけつかる子細はな。ヲ、わしや吉三様ンのうばじやはいの。奉公に来た京での訳を。知ラそふにも有家はしれず。認イた置イた此文読で。疑イはらして下されと。さし出せは封おし切リ。よむ間もせつなき人々の胸は早鐘つき詰メし。吉三が思ひ（56オ）ぞせつなけれ。コレこちの人。女夫の中に設た子は。息才で居るかいなと。気のせく儘にさし寄ス る。蝋の火飛ンで挑灯の。焼るを是はともみ消はづみ。披し文も炎〳〵と。もへたつ跡はまつく

らがり。吉三郎心をいらち。ヤア〳〵与五蔵。松竹梅の一軸詮義の手がゝり。胡乱な義なれば切腹とげるが何ゝと〳〵。ア、暫ク お待なさい。仮初ならぬ一大事。それへ参つて申上ふ。女房疑ィはれた。案内しろと打つれて。入くる内も善悪の様子聞ク間そやるせなき。

樋守与五蔵しづ〳〵と打通り。拙者只今。衣紋坂の伝七が方へ参り。女房きそが中置キし様子を聞ケば。日本堤に小柄を落しおかれし（56ウ）ゆへ。吉三郎殿の御難義とや。何をか隠さふ其人殺しは此与五蔵。早く寄ッて縄かけられいと押直れば。是はと皆々驚く中にも源次兵衛。イヤ人殺しの詮義は二段。先ッ松竹梅の一軸の詮義どうじや聞たい。ホ、お心のせくは尤なれと。存念ござれば其事も。縄かゝらねば申さぬと。いふにぜひなく吉三郎。下緒をたぐつて与五蔵取ッたと即座の早縄。かゝりつながるうばが歎き。お七も杉も裏門に聞耳立る計リ也。

与五蔵憶せず。コリヤ女房ほへず共。おれが懐の紙入に有ル書状。御親子のお目にかけいと。取出さすれば吉三が引取。何々御頼によつて。五松家より御懇望の松（57オ）竹梅の一軸。盗取リ其元へ遣し候所に。いまだ御褒美の沙汰是なきゆへ。御催促申候。ムウ肝心の名書キの所を引さいたれ共。此手には見知リ有ル。吉祥院の同宿快典が手跡。ホ、よくもお見知リなされた。昨晩ほうびの金。貰に行クとぬかしたゆへ。非道な事とは存ながら待伏して。分ケまへおこせと懐中へ手をつゝ込ミ。思はずばい取たる其手紙。宿へ帰り披き見て。御詮義の種に成べき物と心付。早速伝七を頼み御注進申たは。御厚恩に預りし五松様への御奉公。又身の科を我と我。名乗ッて出しは娘が為と。いふに女房不審顔。ナフ娘とは誰ヵ事。ソ、そこに居るお雛は。二人リが中に設（57ウ）た子じやはやい。ヤア〳〵。そりやほんかいの。ヲ、サ京で夫婦が

別レ々に流労の砌リ。水子の養育成がたく。早咲の梅を添。北野七本松の辺へ捨置キ。五松家へ拾れ。雛鶴と名を付ケ。お育なされて下さると聞しより。お家長久娘息才延命と。十六年が其間いのらぬ日とてはなかりしぞや。ア、いかにも。わたしが身に覚の有ル捨子の咄。扨はおまへがと、様ンか。そんなりやお雛様ンはわしが娘か。か、様のふとすがり寄リ。名乗合たる嬉しさより縄目を悲しむ妻と子が涙にしんみを顕せり。ヤア両人共に何が悲しひ。御両所の手前も面目ないが。拙者めも京都に罷有し時は。岩木藤左衛門（58オ）といふ。三石三の侍ィ成ッしが。色ゆへに樋守に迄落ぶれ。憂年ン月を送る所に。此間衣紋坂の薬湯にて。源次兵衛殿の嫁は元ト。五松家のお妣。雛鶴と聞しを証拠に我カ娘と知リ。それゆへに身の科を打明ケて。縄か、りしは吉三殿の為。あのお雛めが不便さゆへでござります。早く代官所へ引渡し。聟吉三郎に科なき次第を申披て下されよと。健気にいへは源次兵衛。親子はいとゞ哀さ増り涙よそ目に紛せば。お雛は吉三か指添を抜手も早く。咽へぐつと突立る。四人あはて、コハそもいかに何ゆへのじがいぞと。いふ声洩て外面より。ナフ申お雛様ン。早まつた（58ウ）事遊したと歎けは手負は。介抱する人を力に高欄に延上り。コレナアお七上郎。わしやと、様ンの為に自害はすれど。名残惜ひは吉三様ンの事。こな様ンを頼ます。今迄より猶大切に。いとしぼがつて添て下さんせ。思へは〳〵わたし程果報拙い者はない。お主様のおさしづにて。器量のよい殿御を持ッと悦しかいもなく。たつた今祝言して。直ぐに別る、悲しさを。思ひやつて下さんせか、様とすがり付てむせび泣キ。勿体なや此春から。おうば〳〵と朝夕付添ィ有ながら。おまへを産の母様としらなんだ。ふしぎに今ン夜と、様に廻り合ッたりやあの縄目。聟の為に代官所へ引れて（59オ）行ふといはしやんすを。何ンと見て居られふぞ。親に先だつ不孝を赦して給はれと。両手を合せニタ親を。ふし

拝み〳〵。深手の上に気をもみ歎けは父母わつとむせび入。藁の上より人手に育。恩も情もかけぬ親に。孝行たてゝの自害とはうきめを見よといふ事かと。前後正体泣叫び。胸の堤も張さく計。こぼす涙は荒川の樋の口。ぬきしごとく也。歎きの隙より吉三郎。立寄見れは必死の深手。責ては親の命を助け未来の迷ひはらさせんと。与五蔵が禁を引ほどき。云号のお雛が為に父なれば。我為には正しき舅。ア、是々。其お志は嬉しけれ共。拙者が命助られ（59ウ）ては。イヤ快典を手にかけしゆへ。お雛が自害致したれば。其元には構なしと。いふに引取源次兵衛。ヲ、いかにも。先程平太が持ヂ帰りし。嫁が小袖を証拠にして云ィひらかば。与五蔵の身にも別条なく。躰にも切腹させずに事を済す気遣ひすな。ヱ、イそれはどうして〳〵と。悲しき中にも人々一同に生出る心地。ホウふしんは尤。名書ッキの所は破たれ共。快典が自筆の手紙。是を証拠に源次兵衛が引受ケて。一軸の詮義をしぬかば。平太がぐつ共いふ筋なし。扨吉三郎は寺へ帰り。御主人より給はりし。嫁が菩提を弔ふが。お上へ対してせめてもの申訳。夫婦の衆。手負の介抱頼入ルと云捨てかけ（60オ）出る。ナフお待なされ親仁様と。つゞいて吉三が追かくれば。何事やらんと誰々も心を付ク表の門外。源次兵衛立とまり。コリヤやい躰。あの燭台の火が消ると。平太が爰へ来るは必定。こつちから先ンを取ッてぼしかけ。そちが身の云訳たつる爰放せと。ふり切〳〵走行。お雛はいまはの。目をひらき。ア、有難や舅御のお情で。とつ様の命助からしやんすと聞ィて死れば。思ひ置ク事は何ンにもなけれど。名残に最一ト目。吉三様ンお七さん。未来のみやげにお二人リの。お顔が見たいと声ふるはし。絶入息の下よりもくどき願へは。ヲ、今迄難面此吉三を。臨終の際迄其様に恋したやる。心根がいぢらしい。イ、ヱイナ（60ウ）此お七を。恋の仇とて恨ミもせずおいとしの身の果やと。見上ケ見おろし三人が。顔つく〳〵と打守り一度にわ

つと歎くにぞ。母も見る目にたへ兼て。なまなかに親と子が廻り合ずば此様な。はかない死はせまい物。いかなる前世の報か業か浅ましやと悔めは父も。身をなげふし。死べき我レは助りし娘への恩がへしと。涙の粒曲鬢際よりふつゝときれば。女房も倶に笄曲。切ッて払ひし此世の紲。妙法授戒の輩は。女人ンも成仏疑イなき。御みやうはん也なむ妙。法蓮華経。皆一同に合掌の。十のれんげや九つの花の台に法の道。

コレなふ今娘が息を引（61オ）取ルと。歎くは恩愛親子の道。闇路を照す燭台の火影と倶に消て行。雛は冥途へ趣く道お七吉三が帰るさの。道を替るは先キだつ人に義理を立たる情の道。色も無常も一如ぞと。悟れは菩提の道しるへ名残リは。尽ぬ恋衣袂を。しぼりて別レける

## 四之巻

神と君との道広く世は動なき江戸の町。磨の目形に建続恵に栄る時成ルかな。天和元年師走の空世間の節迫かけ構ず。昌平橋筋のさ〳〵と。万屋武兵衛油屋の太左衛門。連立来る向ふより。剃下奴が息を切ッて申々御両人。あんまり（61ウ）遅さに迎に参た。ホヽ平太様のお待兼は御尤。イヤサ旦那はとつくより木挽町の芝居へお出。それに付。コレかう〳〵とさゝやけはナントいはるゝ。吉祥院の上人が吉三郎をつれて。芝居見物して居る。サア早くきて吉三めに。意趣ばらしをなされいとの旦那の使イ。アヽそりや忝ひおしらせ。追付それへ参ります。こなたは先キへいかつしやれ。ヲヽ今中村七三が曽我の十郎で。和田酒盛の面白イ胴ぶくら。見はづしてはならないと奴は芝居へ立帰る。

太左衛門小声に成。芝居で吉三に出入しかける其仕様はどうじや。ハテ楽屋から呼出して。存分いへと有ル平太様のおさし

づと。二人がひそ〳〵しめし合せて行先キより。いきせきと八百屋久兵衛供の丁稚がべらつくを。気の（62オ）せく儘に引立れは。アイタ、、。腕が痛であるかれぬ。いたい〳〵と泣出す。

武兵衛立寄。ホイ久兵衛殿か。コレハ武兵衛殿太左殿どれへござる。イヤ見れは丁稚めがほへおるが何ンとしました。太左あのみつちやめが頬を見や。悉皆分銅の横手じや迄と打笑へは。ナフ武兵衛殿。時分がら。利銀の催促にても廻らつしやるか。ナンノそんな事は手代共がします。おらは遊び様がないによつて。木挽町の猿若山三が顔見世狂言。大出来と評判するによつて見物に行ます。ホ、おれも木挽町迄商売筋で。イヤ商売筋ではない。聞ケは吉祥院が。けふ猿若が芝居へわせたげな。其桟敷へ吉三郎を見舞にいかしやつたの。お七を目当に三百両。遣はする智には（62ウ）鼻あしらひ。ふきやちる様な小姓吉三に折見舞。ア、是々太左衛門殿。そりや何いはつしやる。金の貸借は格別。お七は金銀で売娘じやない。端から何も構しやんな。イヤ構はふはいの。コリヤ〳〵太左衛門だまれやい。モウ親仁殿ンも気をしづめて下さい。何事もおれが貰ますと。いふに久兵衛納得して。太左殿気にさはつたらこらへさつしやつれ。けふはこちの嘉例の餅搗。先達ッて人はやつて置ィたれど。間違ぬ様に。きて下され武兵衛殿。アイ。芝居が果たら。直ゥに宿老殿誘て行キませふ。扨吉三郎めは親の内をしくしつて。又吉祥院へ舞戻てけつかるげな。ナントお七は前へ行たがりはしませぬか。ハテ其様な気遣ィさつしやるな。二タ親がきつと付て居る。サア今（63オ）夜の餅搗はお七とおれが内祝言。委細の事は。お宿老の弥三右衛門殿に咄して置キました。ヲ、そんなら名主殿に聞ませふ。サア弥作。腕が痛ムとてへたばつて居ては済ぬ。供してこいとせり立られ。ア、痛ミます様にござります。あしらはしやつて下さりませ。芝居の木戸口出しなに。ソレハ〳〵うつくしい娘が。

ヱうまそふなあん餅を持て行ク。ちよいと一つ抓で仕てやつたれは寄ッてたかつて。突こかして踏おつて。腕ががつくりといふて痛ミます。旦那様。何ンぞ薬が付ケてほしい。ヱ、儕レに付ふ薬リはないと。叱れは武兵衛聞兼て。コリヤ阿房よ。爰へうせい直してやらふ。すりや芝居の木戸口で。あん餅の盗喰で。サア案の外なめに逢ッたと痛い腕をさし出せは。

太左衛門に引ッぱらせ。（63ウ）紙入レより帕取出し。日影にすかし痛所に押あて〳〵。それ痛い方の手をふつて見い。ハ、アてもめんような。旦那さん。痛さがとんとどこやらいた。コレ〳〵〳〵〳〵。踊ろと儘じやと腕を振てかけ廻れは。

久兵衛も恟りして。テモ扨もふしぎな物。どれ武兵衛殿。其帕ちよつと見ませふ。イヤそれから御らふし。金持といふ者は。色々の結構な物が手に入ルじや。是からお七を手に入れる稽古の為。山三が芝居へ行キ。色事の仕様見てかふと。太左衛門を引連レて。木挽町へと別レ行ク。

久兵衛暫ク小首を傾け。武兵衛が持て居た今の帕は。慥采女殿より預り置ィた。松竹梅の御神筆の包ンで有た。雪の下という腕。元トの色は薄紅梅で有たが。花色に染直して持ッている（64オ）にもせよ。雪の下の地紋があれは慥にそれ。追かけて改見んとかけ出しては立とまり。イヤ〳〵大切ッなる詮議筋。途中で何かといはふより。内へ帰つて娘お七に言含め。色じかけにしてあの帕を。こつちへ取ッて雪の下か。イヤ牛の舌ならうまからふ。ヤイだまりおれ。しやべらずと供しおれと。子ゆへに苦労。紫竹の杖つき詰。てこそへ急きける。

名に高き猿若山三が大芝居。見物群集の其中へ色に。ほころぶ花道伝ひ。お七はお杉引つれて恋しき人の跡をおひ。勢曽我の狂言より見たさ逢ィたさ数々の。桟敷〳〵を見廻して。アレなふお杉。東側の掛桟敷に吉祥院の上人様。其傍に吉三様

が居さんすはいの。トレ〳〵。ほんにと手をたゝき。まねけど（64ウ）しんき気がつかぬ。いつそあそこへ行ふじやないか。皆様御免ゝ成ませと二人は桟敷へ急ぎ行。

上人見給ひ。コレハお七。最前は親久兵衛殿わせられたに。かさね〳〵の見舞添い。愚僧もけふは年忘レにきたれ共。はやり芝居で桟敷の思はしき所がなふて。窮屈には有ふが。是へ〳〵と挨拶あれ共うはの空。サアおまへ方のお出の様子をとゝ様の咄。武兵衛や太左衛門も芝居へ行カれたれは。もし吉三様ゝと喧嘩などがありやせまいかと。聞ィてわたしが気遣ひさ。いひたい事もお顔見たりや嬉しうて。何にもいはれぬなふ杉と。いへは吉三は師匠の手前。恥らふ顔は毛氈の。塵を捻て詞なし。

上人声をひそめ給ひ。コレ〳〵両人。武兵衛や太左衛門は此向ふの（65オ）桟敷に居る。たつた今迄大酒。呑草臥てぞんざい千万な。桟敷に寝たそふな。アレ〳〵供の奴が扇で野ぶろあおいで居る。見付られぬ様にしやと。衣の袖を覆ひ給へは。はつと二人が胸はまく〳〵。幕の内より。東西〳〵。吉祥院のお小姓吉三郎様急用。楽屋迄お出なされませ。急用〳〵と呼立る。マア呼出しは気遣し。早ふ〳〵と師匠の仰に。吉三は立て入にける。

跡にお七は夫こふ雉子。塒に残る其風情。向ふの桟敷に三人が。呼出しの声に目を覚し。サア平太様武兵衛。今吉三郎を楽屋から呼出した。桟敷には蛸坊主が残つて居ると。聞より武兵衛。見繕ひして楽屋へ行クを平太押とめ。コレサ武兵。役者共が居る所へむさと踏込。（65ウ）狂言の始まる前に騒しては後日の誤り。吉三郎計リに鬱憤をいふたがよいナ。太左衛門合点か。其方もお来やれと。三人打つれ楽屋をさして入にける。

あなたの桟敷は見ずしらず。ヱゝわごりよ達の来よふか遅かつた。たつた今和田酒盛の段の幕が詰つた。何が虎御前を相手にして。九十三騎が酒宴の最中へ。曽我の十郎が見へたれば。敵工藤が無理酒。難義な所を虎が発明なる働き。中山小夜之介といふて。丁どお七そなたの様な女形で有ッたはいのと。咄の半引幕の。真中しぼらせ口上いひ罷出。今朝程より長ヵ事御機嫌能。御見物下されまする段。座中何程か大慶に存奉ります。別して此所は。座本猿（66オ）若山三。矢の根曽我の段左様に御覧下されませふ。ついとはいりしだんだら幕。さら〳〵と引明れば。浄瑠璃太夫大薩摩。三味線引つれ見台に押直れは。御当地贔負の猿若山三。曽我の五郎が矢の根の段。江戸塗の真赤頬いさましかりける〳〵次第也

去程に。曽我の五郎時宗は。力申シの願上り。兄方に向つて太祝。それ。父の仇には倶に天筆和合楽。地福皆円まんぐはんの。軍書の窓の北面に雪を。明りの浅みどり。

痩我をはらぬ曽我の流。伝へ聞養由が。鏑は遠きこま唐土。ちかく和朝を尋れは。源三位頼政。兵庫頭たりし時。鵺といつし化鳥に。矢取ッて打つがひ。（66ウ）南無や八幡大菩薩と。心中に祈念して。よつぴきひやうど放つ矢に。手ごたへしてはたと中。誉は雲井に。鳴渡る。

古今無双の弓勢に。勝りはする共おとらじとちから。自慢の花の春。世間構ぬ素浪人。脚から干蛸も串貝も。取ルにとられぬ酒屋の通。十七貫八百六十四文。横にねの日も初寅も。喰合のなき福神達。どふで貧乏するからは。自問自答の悪たいで申てもふさく。先ッ。大黒は慮外者。とはどふだ。ハアテ不断頭巾を脱ぬはさ。ゑびすは身持がうそぎたない。とはどふだ。鯛をおだきの胳。精進日には付合れぬ。毘沙門の甲頭巾用心過キてうつとしい。弁才天は舟ナまんぢう。浪乗

舟の（67オ）うら丶かにとろ〳〵ねむり時宗はした丶か過たる雑煮腹。食後の一ぷく千金ンと有ルに任する安たばこ。鼻のさきなる春霞打ながめつ丶。居たりしか。ヤアラふしぎや。けしからぬ胸さはぎ。察する所兄祐成。大磯の廓にて。敵工藤に出ッくはし。難義に及びおはするか。いで。某がかけ付ケて。たとは丶。祐経節会汁の鯨の威勢をふるふ共。我レ鱸の飾海老。赤いは爺が譲の血気みぢんになさでおくべきかと。力足を踏しめ〳〵。傍に繋し驢たすきはづして。太腹しつかと即座の鐙。

あらひ轡に縄手綱。大の鏑矢千里の鞭。直クにうては五十町。廻れは三里三がの庄。宇佐美久津美河津か躬。曽我（67ウ）の五郎時宗が。曲馬の程を是見よと大磯。さし。てへ入口切幕どいやどや。やれ喧咤よと立さはぐ。

舞台の見物押のけ突のけ。引立られて吉三郎。形チも髪もさんばら鬢。ヤイ〳〵武兵衛太左衛門。何ゆへの狼藉。ヤアぬかすな。儕はおれか恋の敵と。平太も傍から腰押て。コリヤ覗な。役者の知ッた事じやないと。吉三一人リをおつ取まいてさいなめは。こらへ兼てするりとぬき。切てかゝる刀をもぎ取引立ッれは。是なふ暫しととむるにかいなき。女心の危さこはさ物思。ひ寝こそへあやしけれ。

お七は火燵に仮寝の夢何とやら魘れて。ふつと起キて。コレなふ申吉三様。〳〵とかけ廻り〳〵。傍を見るより。ヱ丶イ。扨は今のは夢で（68オ）有たか。ハア。はつと計リにかつぱとふし消入ル。ごとくむせび泣ク。声に驚き何事成ぞと母はかけ出。ヤア何ンぞこはい夢でも見やつたかと。せな撫さすり気を付クれは。

お七は偏体冷汗に。しぼる袂を顔にあて。ナフかゝ様。けふ吉祥院の上人様。年忘れに吉三郎様を連レまして。芝居見物に

お出なされしと弥作が咄。どうぞわたしも行キたいと。思ひこがるゝ火燵の仮寝。杉と連立芝居へいて。恋しき人にヲ、気疎。吉三殿に逢ヲた夢見たのが何ンで悲しい。サイナ。向ふの桟敷より万屋の武兵衛。油屋の太左衛門が見咎て。吉三様一人リを大勢寄てのぶち打擲。夢と思へど気に（68ウ）かゝる。悲しいはいなと託にぞ。ヱ、明暮恋し床しと思やる心から。あられもない夢を見る。杉を相手に此紅裏。湯殿しやと云付て置ィたのに。こゝら内に引ちらして。どこへいて居る事ぞ。お杉。〳〵とにへかへる。湯殿の釜の火をおこして携出。申かみ様。お叱なさつて下さんすな。湯がさめたによつて。あの大和ぶろに火をおこさふと思ふて。サアそなたが台所へいきやつた間タに。お七は夢に芝居へ行キ。吉三殿と武兵衛殿。喧咄はさつしやつたを見たといの。ヲ、もしもほんの事なら。お七様ンの悲しかろ。誰レぞ見せにやりたいが夜通しのあも搗で。皆の衆は草臥。弥作殿でも（69オ）つい一ト走リと。立ッを母が押とめて。アノ弥作は新参ン者で。方角さへろく〳〵に覚ぬ阿房。殊にけふは此新宅の。振舞やら餅搗やら。お宿老様がござる筈。それに付キお七には。親仁殿の云聞して置ク事が有ルといの。涙拭ふて奥へいきや。早ふ〳〵とすゝめやり。おれは勝手で善哉の拵へさせふ。杉は其間にゆのし物。きり〳〵と仕廻ッてたもと。心せかるゝ日暮前。表へおとなふ三人連レ。つか〳〵と入くれは。コレハ〳〵お宿老様。武兵衛様玄伯様。よふこそお出と杉が挨拶。久兵衛出向ひ。ホ、名主の弥三右衛門様。いつもの嘉例をはづさずいづれもを連立チ。事おほひ時分ンに。（69ウ）よふござつて下された。イヤ是親仁殿。此弥三右衛門は何年ンか爰の餅搗に。ついに汁粉を喰ィはづした事はなけれど。過し類火に丸焼にあはれたれは。ことしはよもやと思ふたに。此様に普請も出来て。見世を見れは橙 楪 ほんだはら。蓬莱を見る様な。コレ名主殿。正月詞取置ィて。此武兵衛が頼ンて置ィた事をいふて下され。

ヲツトそれはかんてん致した。おれが平椎茸にいひさへすれは。爰の親仁は呑こんぶ。ナフ玄伯老そふじやないか。ヲ、そふ共〳〵。近年の出来分限者を聟に取ル事。何ンの久兵衛殿がいやでござらふ。デモいやな証拠には。お七が（70オ）嫌へは二タ親共にぐるに成ッて。けふよ明日よと嫁入を延さるゝが業腹。悪性な娘とは知ながら。ほれたが因果。ア、是々武兵衛殿。お七が悪性したとは何を見付て。ハテ潔白そふにいはれな。此春寺で小性吉三とお七が中の。起請を見せたを忘レてか。イヤ其起請の相手は湯島三吉といふて。こなたと云号せぬ先キの事。ア、是それもとつくりと詮義したれは。其三吉めは爰のお杉が忍男じやげな。とにも角にも吉三めは。おらが恋の敵だによつて。けふも芝居で踏だり蹴たり。小気味のよいめに合せたと。いへはお杉が恂りし。ソレハまあほんかい（70ウ）な。其喧咤をお七様ンの夢に。ヤア何ンといふ夢に見た。イ、ヱイナ。お七様ンはそんな事を夢にもしらず。此武兵衛様はなぜ遅と。待兼てござんしたと云紛せは。ナニぬかすぞい。お七がおれを何ンの待ふ。イヤ杉けふも芝居で太左衛門やおれに。われが事をくりかへし〳〵。問てゞ有たぞよ。ムウそりや誰レがへ。ハテとぼけない。京都五松の御家老平太様。お宿本ト迄太左が送ッていたれは。てつきりと戻りには。三島暦見る様な。文がこふ待て居いと。なぶれは名主がせいつかし。ヱ、此師走の果に濡ぜんさく聞ケは一倍冷る。餅搗を兼て今ンの夜の聟入。盃が済ンだら其跡で。きんごひかふと思ふて。かるたを持（71オ）参致シたと。見すれは久兵衛。コリヤお杉。すだ町の長和殿をも呼ンでこい。夜と倶に離座敷でお咄申さふ。皆々奥へと夕間暮。男女子がいそがしげに。行燈ともせは表の戸。しめやかに降夜ルの雪。つもる思ひに。安からぬ。むざんやな吉三郎。髪も形チも取乱し木挽町より直ク様に。恋しき人を簑笠に。忍ぶ姿ぞ哀なる。

杉はそれ共白雪に。ひらく傘門ト口。すれ違ふを。コレなふ是小雪上郎。〳〵と呼かへせは。テモふしぎや。世に有し時のわしが稚名。知ッて呼しやんすは誰レじやへ。ヤア吉三様ンか。こりやまあどうしたお姿と。様子とへ共さしうつむき。とかふ諾も泣計。ム、聞へた。（71ウ）扨は芝居で武兵衛と喧咤さしやんして。それから直クにお出かへ。ヤア武兵衛とおれが喧咤せし事誰しらした。サレハイナ。お七様ンのおまへを大切ッに思はしやんす念が通じ。仮寝の夢に見て。それはきつい気遣ひがり。サア其真実なお七の心に引されて。喧咤の場より師の上人様の。お目を忍ンできたはいの。八丁堀のしるべの方へ立寄て。此簑笠を貰ひ受ケ。恥もちじよくも顧ぬ。是が安森源次兵衛といふ。侍ィの子の有ふ事か。諸人の見る中で。町人づれにたゝかれて。のめ〳〵と爰へ来リしを。御存なければ上人様。嘸や案じてござらしやろ。師匠の罰親の罰。当ッて（72オ）吉三が此形リと又さめ〳〵と歎くにぞ。杉も涙を押とゞめ。わたしが使ィにいて戻つたら。首尾してどうぞ逢せましよ。それ迄待てござんせと。内へ伴ふ二人がそぶり。暖簾のかげよりいぢわるの。武兵衛が見る共。しらぬ危さ竹縁の。下タに吉三を忍せて。お杉はとつかは走行。

始終を見聞ク武兵衛が一鉄。やつちやしてこい爰に有。釜な熱湯を吉三めに。縁の上からあびせふか。イヤ〳〵〳〵。杉とお七がつうくつの。徹蹤見付て存分ンにしてこまさんとそしらぬ。顔して奥に入る。

不便やお七は夫マの吉三が来りし共。しらで思いに身をこがす。火燵にとんと打もた（72ウ）れ。泣沈たる折こそあれ。台所より女子共。三方土器束熨斗。追々座敷へ持運へは。母は銚子に蝶々の折そへ付てせはしげに。コレなふお七。なぜに爰へはづして居やる。ちやつと奥へきてたもと云捨行ケは。

跡よりひよこ〳〵前髪打ふり。丁稚の弥作取肴。手に持ながら立とまり。コレお七様嬉しいか。否の応のと有とても。親と金には肩骨が。おれもちつくりあやかりたい。吉三様の聞ヵしやつたら胸の火がもへるであろ。もへる序におまへ程火に縁の有お方はない。火事ゆへ寺で徒し。火事ゆへ今度の嫁入し。あの脾の臓の強い。武兵衛様に抱れて寝て。（73オ）ひばりの様にならんしよと笑て。へこそは走入る。

お七はわつと声を上。ナフと、様か、様恨しい。わしが心にどの様な行れぬ義理が有ル事やら。親子の中で問れずは人伝にても聞もせず。死るといやと云放す。事を好しなされかた。娘一人リを捨るのか。あんまりむごい心やとかつぱと転び泣けれは。縁の下には吉三郎爰に有事しらせたや。隠蓑隠笠なら抱付ィて。心のたけをいひたいと声も得立ぬ忍び泣。母は立出。コレお七。先キに親仁殿の云聞カさしやつた訳あれば。武兵衛の心に従ふは暫シの間と思ふてたも。吉三殿のお主へ忠義立（73ウ）さすは。そなたの心一つぞや。サイナいとしい夫トの為と思へど。ちつとの間でも武兵衛へ嫁入する事は。かゝ様こらへて〳〵と託立ッれは吉三郎。何かは様子しらね共我カ主人へ忠義の筋と有ルからは。夫婦の縁も是迄と。あきらむる程悲しさのまさる思ひぞ不便也。イヤなふお七。若い時には此母も。一チ度は花をやつてきて。ほれたほれぬのすべもしり。器量のよいとあしいのは老ィの目にさへ見ゆる物。そなたのが皆尤。いやといやるをむりにとはけふ迄いはぬ二タ親を。むごいとはいはれまい。世が世の時で有ふならたとへそなたが合点しても。あんな男を待タ（74オ）さふか。器量発明揃たる聟とならべて見よふ為。ぶんに過キたる廿荷の単笥長持取揃。どこへ縁付キさすとても恥しうない様に。仕拵たる襟数を残らず類火にあだとなし。それから発て此難義。世間の掟は嫁入して。夫トを随分大事にかけよと教

れど。顔も心も憎ていなる武兵衛に添は暫しの義理。飽れる様に身を持ナなしや。何時去ッて戻しても忝ィと受取て。其時こそ打はれてすいた人に添してやろ。合点がいたらあいといや。あいといやとて撫さすり。ほんに又けしからぬけふの雪。ひへる時分に気をやんで。積など起してたもんなと。（74ウ）下タに忍ンで聞ク人の。有リ共母は白張の障子をさせば。いとゞ猶吉三郎は羽ぬけ鳥。立ッもよは〳〵手も足も。雪にこゞへてそつと出。アヽ母のつど〳〵いはれしに。一つとして無理はない。不便ンやお七が武兵衛へ嫁入する事を。否共応共得いはずして。悲しがるのは皆おれゆへ。兎に角に我々が。過古よりうすき契りぞや。御主人よりお指図有し。云号のお雛を嫌ひ。剰自害をさせ。親仁様に歎きをかけし天罰の。忽チ当るといふ事を。今といふ今思ひ知ッた。是より寺へ立帰りて出家する。ふつ〳〵とおれが事を思やんな。こちには思ひ切ッたるぞ。さはいへ今宵きた事を。ちよつと成としらせた（75オ）やと。そつと寄ッて障子覗は我影の。若もや内へ見へんかと立のいて。ハア、迷たり。最早武兵衛といふて親の赦した聟があれば。其目を盗は正真の密夫。今日只今さつぱりと縁切ッた証拠には。お七に貰し此起請。戻すより外はなしと押披。懐中の石筆にて。誓紙の裏に細々と。心のたけを書残し。

笠の紐に結び付。お七が是を見るなら嘸や恨ん。責て様子を云聞せ。おさめに顔がにし〳〵と。見たや。逢ィたや行キたやと。障子一重を関の戸の。明ればやがて逢坂の道共。わかず泣尽す。ヘツヱ思へはすご〳〵と。寺へ帰る所でなし。儕レ武兵衛め赦さじと。奥を目が（75ウ）けて馳行ケは。久兵衛かけ出ヤア早まるまい。様子は先キから立聞しました。イヤ武兵衛を何ンでかぼはつしやる。サヽ其腹立は尤なれど。喧咄の仕かへしじやと人はいはぬ。お七をねとられた腹立に。切込ン

だといはれても大事ないか。イヱそれはサアそこを思ふて。とめるのはこなたの為。気を鎮て聞ヵつしやれ。けふ芝居の戻りに。弥作めが腕を突折たを。武兵衛が呪てやろふと紙入より。取出した帷を見れば。松竹梅の巻物の包で有ッた雪の下といふ帕。それを手がゝりに彼ノ一軸の。盗手を吟味しこなたに忠義が。立させたいと思ふから。お七に云含嫁入をすゝめますと明カす詞に。ハア、左様の事共存（76オ）ぜず。早まつて今の振舞。先刻よりお袋の。お七に異見なさるゝ内に。ちらりと様子聞ながら。そこの所へ。気の付カなんだは若気ゆへ。まつぴら赦して下されと。雪に頭を摺付クれば。ヱ、武兵衛にかつた三百両の金が敵。思ひ合ッたこなたに。娘を添せぬ口惜さを推量して下さい。昔の八百屋久兵衛なら。かゝる無念は有ルまいと。悔めば吉三は有難涙。然らば寺へ帰ります。私が参りし事をお七には。ヲ、隠すのが互ィの為。こなたに心を引されて。武兵衛に大事を悟られては詮がない。早くお寺へいなつしやれ。ア、そんならお七へ。責てもの形見ぞと。さし出す蓑笠。久兵衛受取（76ウ）互ィに別レの詞さへ。涙の氷柱玉霰袖をへかざして帰りける。

久兵衛跡を見送ッて。いとしやお寺育で。ちよつと出るにも。供を連ねは歩ぬ人が。恋なりやこそ雪の降のに。寒さもいとはず。蓑笠きて。深草の少将の九十九夜にも増る深切。お七めが見おつたら。気違の様に成ルであろと。子ゆへに迷ふ親心。障子洩くる武兵衛が声ナフお七。嬉しいそもじの心底を。お袋に聞ィて爰へきたと。しなだれかゝる影法師。様子きかんと久兵衛は縁の下タに身を忍ぶ。お七は障子押明て。さつても松に雪が積つた。此寒さではちよつとには解まい。わしが心もとけ兼るとうるさく紛す思はせぶり。（77オ）武兵衛は現、たはいもなく。ム、解ぬとは此鼻が。吉原通するによつての疑ィか。サア日外お寺で。吉三様ンとわしが中の。起請の吟味さしやんした代には。吉原のふかまがおまへの所へ書ィ

ておこした。起請が有ルか詮義する。紙入レをおこさんせと色に事よせ。引出す手先ヰをしつかととめ。イヤおれが紙入には。命にかけかへの印判。其外大切な物が入レてあればむさとは見せぬ。ハテどの様な大事の物にもせよ。真実わしを思ふてなら。隠してゞは有ルまいけれど。根が嘘じや。偽りじやと気を持タすれば。

縁の下タには父久兵衛。どうかこふかと身をもみあせる蓑の音ト。武兵衛は（77ウ）一途に吉三と心得。ナフお七。けふの雪に降込られて。此下屋には。のら犬が蟄でけつかるそふな。が。もし犬ではなふて吉三なら。そなたはたんと嬉しかろと。うらどいかゝればお七は何ンの気も付ず。イヱ今では吉三様ンもわたしも互イに秋風。ヲ、其詞に違イがなければ。此紙入をそなたに渡して吟味させふ。サア商売からの八百屋万の神々を誓言に入レ。おれが目の前で湯起請を取ッて見しや。ヱ、イ湯起請とはへ。ホ、合点が行まい。爰に幸熱湯が有ルと。引ちらしたる絹のとき物ひんまろめ。湯熨の釜を引掴。サア此湯へわごりよの手を突込で。誓言を立て見しや。嘘なりや忽チ湯火瘡（78オ）する。定なりやちつ共熱ふない。おづ〳〵しやると気が廻る。サア〳〵どうじやとせちがへは。

戻りかゝつてお杉が怕り。下タに忍ンで爺親が。心をこがすせつなさを。しらぬお七が悲しさつらさ。父の云付夫トの為。神や仏の力ラにて。湯起請を首尾よふとらせて給はれと。心に念じつゝ込ム両手を押とゞめ。ヲツトそれで心底見へた。もふ湯起請には及ばね共。迚の事の疑イばらし。此熱湯をそなたの手づからまつかふ仕やと竹縁の。上よりざんぶと打あくれは。ぐらつく湯玉は久兵衛が。弓ン手の肩より半身朱に悶絶すれば。ヤア誰レじやぞいなとお七が仰天。立聞ク杉も気をあせれば。ハテ（78ウ）お七怕りしやんな。犬じや〳〵と紛す所へ。

母はとつ〳〵出来り。ナフ名主様や玄伯様のお待兼と。いふに武兵衛が顔につこり。今の心中見るうへは。望の通り紙入を預ける程に。千話文起請の類が有ルか。とつくりと見ておきや。此拍子に奥へいてきんご引ィたら。どうだいにあざがあがろと。悦び武兵衛が入ければ。

杉はかけ寄むなぐら取コレお七様ン。いかに武兵衛づらに心中が見せたいとて。吉三様ンによふは熱湯をと。いふに驚きナフそれは誠か悲しやと。お七も母も狂気のごとく庭におり。蓑笠引のけコレなふ申吉三様ンと。引おこせは父久兵衛。息も絶入ルやけどの苦痛。（79オ）こはそもいかにと三人が。すがり寄ていたはれは。

お七は悲しさやるかたなく。勿体なやとゝ様ンの下タに隠れてござんすを。犬じゃ〳〵と武兵衛にだまされ。いかにしらぬこつちやとて。親に熟湯をかけるとは。不孝共過共。いふにいはれぬ身の罪科。わたしに罰があたらいで。あたる者はありやせまいとくどき立て泣キくやめば。母も涙にかきくれて。しらぬ事なりや。娘お七が麁相共しかられぬ。何ンの為に親仁殿。爰に忍ンでござつたと。問れて久兵衛くるしげに。ヲヽ嚊合点がいこまい。此簑笠を見て。吉三郎が忍ンで居やると武兵衛が心得。お七が手づからおれに（79ウ）熟湯をかけたればこそ。思ふまゝに願ィが叶ふた。コレ杉。其鼻紙袋に。何ンぞ目覚の物が有ふ早く見や。アイとお杉が改ムれば。久兵衛は老人の。骸のひりつきこたへ兼。コリヤやいお七もふ泣ク な。そちが不孝にはみぢんもならぬ。嚊ァ庭の雪を。ちやつと付ケておくりやれと肩をぬげば。赤子の肌見る様にたゞれし所へぬり付る。雪より先キに親と子が心。きへ入計リ也。イヱ申此紙入に。何ンにもわたしが目覚の物は。ハテないとはいはれまい。其帕は親父采女殿より預りし。湯島の宝物松竹梅の一巻が。包ンで有ッた雪の下の椀さ。ヱヽイそんなら色

が薄紅梅の筈成ルに是は縹。（80オ）サア人の各をおそれて。武兵衛が染かへたに極つた。灯にかけてとくと地紋を見られよと。いふ声聞取ル門ト色の口。いつの間にかは太左衛門内の様子を窺足。そつとすぼめる傘の蛇目光らす行燈の光リに。杉は帕をすかし見て。いかにも〳〵織模様に。雪の下の唐草が有からは。ホ、其気が付キさへすれば。委細云教るには及ぬ。今より八百屋久兵衛が下女の杉ではない。湯島の神職。柾采女殿の娘小雪上郎。お尋の松竹梅の一袖を包し帕。万屋武兵衛が持て居ましたと代官所へ訴へ。御親父の窄者の難義を救れよ。ハア、忝ィと帕を戴く後より。（80ウ）ちよいともぎとる太左衛門。ヤア何仕やるとむしやぶり付クお杉を蹴のけ。つゞいてかゝる母もお七もはり廻せば。見兼て久兵衛。片身は叶はぬ片手業。せんかた尽て見へたる所へ。

丁稚の弥作大小ぼつ込飛ンで出。何ンの苦もなく太左衛門をどうど投。持たる帕をばいかへし刀ひんぬき割打に。りう〳〵と打のめし。動かはたんだ一ト討と。にらみ付ケたる目の内りん〳〵立派な侍ィ。顔打ながめ人々は。恟りするやら嬉しいやら。八百屋の見世の薯蕷。鰻に成しも斯やらん。

手並にこりぬ太左衛門。ヤイ素丁稚め。どこで大小を盗ンでうせて。阿房力でよふゑらいめに（81オ）合せたな。其帕を人手へ渡しては武兵衛やおらが首が飛。戻しあがれと掴付クを。手玉のごとくひつくりかへして踏付〳〵。腰の手拭猿轡。徽索しごいて後手にしめ上れば。お七親子は手を打て。コレ弥作。俄にそなたは。強ふ成ッてりかうに成て。侍ィに迄なりやつたはどうした事。ホ、いづれものふしんはれぬは道理〳〵。久兵衛殿。拙者が頬は見忘れらるゝ共。此大小をよもや忘レはなされまいと。さし出し見すれは興を鮫鞘柄廻り。ヒヤア是は慥。湯島の神職采女殿の大小。ア、いかにも其

通り。そこもとの指図にて舅の魂譲受ケた。湯島三吉でござるはいの。ヱ、イ采女殿の聟（81ウ）三吉は。器量よしの角前髪で有ッたが。扨は。年闌ての疱瘡ゆへへんばになられて。顔の住居が替つたのじやの。イ、ヱイナおまへがた計じやない。女房のわたしさへ日外是へござつた時には。見違ェましてござんす。ハ、、、、生壁十露盤でへさへた様な頬に成リ。髪もぬけ。肺気かるれば声迄も。替る程の重き疱瘡。在所の親一家共が。いつかい世話にて漸〳〵と快気し。江戸へ帰ッても。昔の三吉と人が見しらぬを幸に。女房杉としめし合せ。弥作と名をかへ作り馬鹿に成て。先ン々月から此家へ奉公に入込しは。兼々心得ぬ奴だと思ふ。武兵衛太左衛門に取入。松竹梅の行衛を詮義せんと。思ひ付ィたる一大事（82オ）なれば。かほど頼もしき久兵衛殿御夫婦にさへ。心を奥の木部屋の内に此大小を隠し置。今迄三吉が身の上をつゝみし段。御免なされて下されとお杉も倶に侘るにぞ。イヤ其侘言はこつちから。弥作〳〵と。下さげそふにいひまして赦して下され。イヤサそれは互ィ。お七殿の色に迷て武兵衛めが。此帕を渡したうへは。代官所へ言上し。松竹梅の一軸の御詮義を願ィませふと。いふに久兵衛くるしき中にも勇をなし。ヲ、いかにも。一軸の行衛が知ルれば。吉三郎殿親子の忠義も立チ。采女殿の牢舎も遁れ。こなた女夫の悦びは久兵衛が満足。ヤイ太左衛門。此弥作が（82ウ）腕を突折たといつしはな。打身金瘡立所に癒る。此帕を持てけつかるかためし見ん方便。けふも芝居の戻りに。ひつたくらふかと思ひしが。帕の色が替りしゆへ。とくと実否を糺さん為。やつぱり虚気に成ッて居た。今爰で久兵衛殿のやけどをいやし。雪の下の奇特を顕し試んと。偏体を帕で撫廻せば。死体のごとく変じたる。色も痛も即座に直つた。コレ見や嚊。娘も悦べ〳〵と。手を打ふつて見せければ。ほんにふしぎや嬉しやと悦び合ッぞ道理也。コリヤ〳〵娘。武兵衛をたばかる邪魔になろかと。さつき

には隠していたが。吉三殿がわせられて。又逢ッ迄（83オ）の形見とて。残しおかれた此蓑笠と。渡せはお七は取すがり。歎くをせいして湯島三吉。ア、猶予する所でなし。もし武兵衛めが風をくらふて逃ふも知レぬ。御夫婦は座敷へ行て気を付られよ。拙者は是成ルどろぼうめを代官所へ引渡し。仰を受て又もや武兵衛を搦取に向ふべし。ホ、然らは片時も早く急れよと。夫婦は奥へ。お杉を引連レ三吉は。縄付引立別行。

お七は更に夢現。吉三様ンの此蓑笠。形見にせよとは心がゝりとよく〳〵見れば。菅笠の紐に結付ケたるは。文でもなしとひらけば悲しや。わしが方より吉三様へ送りし起請。裏につど〳〵（83ウ）書残す。訳は出家の思ひ立。縁切ル程に親々のさしづに随ひ。武兵衛へ嫁入せよと有。こはそもいかにと計リにて。蓑と笠に抱付キ前後ふかくに伏しづみ。思へは先に。かゝ様ンの異見なされし時。武兵衛へ嫁入する事を。一途にいやといはなんだが。お腹が立ッた物であろ。今の帕を取戻す。爺様の云付と。いかに御存なければとて。お寺へいんで。出家せふとは曲もなや。あんまりむごい思ひ切。云訳せふにも侘せふにも。最早お出は有まいし。杉は居やらす便リする。頼ミも綱も切果てたかと。身を打ふしてむせび入。せめては君がうつりがの。残る形見の此蓑や。笠もかぶつて此様に。しよんぼりとした（84オ）形リをして。雪にこゞへし水鳥の。翅しほるゝ袖の雨。着て見ては泣キ。捨ては泣キ。爰に歎けは座敷には三国一と云イはやす。聟とは憎や穢しや。それゆへにこそ相思ふ。中を儕レに引さかれた。我カ夫戻せ呼戻せ。出家落した。罰が当つて生キながら。火にはまつても大事ないとかけ廻り。形チも乱れ気も乱れ。乱薄に吉三の文字。模様に縫し下着の振袖。涙にしぼつてかつぱとふして泣沈。思はず火燵へくばつてはつと。煇る煙に驚きしが。消もやらず両手に取ッて。ハア〳〵そふじや。思へば過し類火がいも

せの中立チ。又もや。家が焼たらば。寺へいて。逢れると。結の神のおしらせ（84ウ）かと。ふつと付ィたる出来心袖引ッちぎりぐる〳〵と。蓑にひんまく身の因果。

折から立チ聞ク武兵衛が悪意地。詞につくい女郎め。いつその事火付ケにして。訴人せんと隠れかゞめば。

表へ三吉組子を従へひかへたり。お七はうろ〳〵庭の人音ト。詞悲しや武兵衛がくるそふな。隠れん物と二階へあがる。

階子は苦患の三悪道。ぽつともへ出す蓑の火を。詞見るより声立テ。アレ〳〵お七が火を付たと。戸口へ出るを武兵衛取ッたと組しけば。二階の障子にくはつともへ立ッ火花に周章。お七は下タへ遠近の山風。恋風吹立て我より。先キへけふるらん

五之巻（85オ）

訟を聴こと吾猶人のごとしとかや。戸倉十内私の計ひなく。理非を鏡の牢屋形。科人刑罰の沙汰其隠レあらざれは。命乞の願ひによつて。吉祥院の日玄上人。円乗寺の南縁阿闍梨。夜の内より来臨とて数の灯かゝげさせ。近習取次諸役人異義を。たゞして相詰る。

日玄上人すゝみ出。詞愚僧が旦方。本郷八百屋久兵衛が娘お七。死罪に極マるよし。十悪五逆の罪人も助くるは仏のじひ。其流レを汲我々。何とぞ彼レが命を乞受。菩提の道にすゝめたしと。あじやりも倶に頼るれは。十内眉をしはめ。詞日玄上人は我甥吉三郎が厚恩の師。又南縁あじやりは五松殿北のかたの御連枝。彼レ是もつて黙止がたき願ひ。お上にも不便ンの余りに去（85ウ）年ンの冬召捕リしより。一ケ年ン余も御詮義を延し。一ト言にてもお七が存ぜぬといはゞ助度ク思し召るれ共。吉三郎に逢ィたさに私が火を付ケましたと。本人が白状すればぜひもなし。殊に其節牢舎せし万屋武兵衛といふやつ。見届ケ

て訴人致せば。何レの道にもお七が命助かる筋毛頭なしと。事を分ケたる一言ンに阿闍梨重て。イヤ十内殿の了簡に及ずは。我レ々直キに伝奏罷出ん。サレハサ其願イ叶はぬ時には。御両所共に御寺をひらかれんより外なし。さすれは女が罪に罪を重る道理。此願イは思召とゞまり。跡弔ふて遣さるが御出家の役たるべしと。理非明白なる詞にハツト顔見合セ。とかふ諾も長袖のしほ〳〵として帰らるゝ。

取次の案内につれて安森源次兵衛。三吉夫婦を伴て打通り。ナニ十内殿。雪の下の帕を染直したる者（86オ）を。三吉が働キにて吟味し。早速町人へ預ケ置注進致したゆへ。夫婦共に召つれて参りしと。一家ながらも公用筋いんぎんに述けれは。ア、それは三吉が重〳〵の手柄。ソレ〳〵武兵衛太左衛門。両人共に引出せと云付る時しも有。つか〳〵来る稲垣平太。十内に打向ひ。明日はお七が火罪に行るゝゆへ。夜の内より是へお詰メなされてござると承り。掛合なれは武兵衛太左衛門に。雪の下の御詮義も有べし。倶々に立合吟味致さん為参上。御両所御免ンと上座に直れは。

獄屋より下部共二人ンの縄付目通りに引すゆる。十内きつと見。ヤイ〳〵武兵衛。松竹梅の巻物を包し此帕。其方が持て居たからは。一軸の在リ所知ッたるに紛レなし。あらがはゝ拷問さするがどうじややい。ハイ幾度お尋なされましても。其帕はお尋の雪の下（86ウ）ではござりませぬ。私が親共が存生の時。湯島の天神様を信仰し。夢中に授つた帕じやと。死ナれた母者人の云伝と。申上れは太左衛門。いかにも私めも聞及ンで居ますが。雪の下の地色とは違ふて。武兵衛が帕は縹といはせも立ず三吉。ヤイうぬらが其巧は顕れた。則チ武兵衛が腕を染させたる。浅草の嘉六といふ。染物屋が白状したと。聞イて二人ンが驚く色目を見て取ル平太。ヤア何をきよろ〳〵うろたへる。此期に及ンで隠すは未練。既に八百屋が娘の

お七はな。火を付た事を。さつぱりと白状したによつて火あふり。うぬらも有様ヲにぬかせば軽ふ取ても獄門か磔。早くくたばつて牢屋のくげんを遁るゝ様に分別せい。ナ。合点か性根をすへて。サア真直に白状せいと。目顔でしらする詞の謎。（87オ）とけてもとけぬ二人の縄付。イヤいか程におつしやつても存ぜぬ事は申されぬと。あらがいつのれは源次兵衛。ナフ平太殿。其元の今の仰は両人の者に。いへいふなと有ル詞のうら。先達て日本堤の樋守与五蔵が。さし上た此手紙よき証拠なれ共。名書キが破レて有ル計リに。長々の間此詮義引擺といへ共。快典をかたらい盗マせたる。頼手は身が推量に違イは有まい。ムゝ其頼手は何者ときつさうかはれは十内しつめて。アゝ御両人の其論は無用〳〵と制する折から。あがり屋の内囲俄に騒追々逃出る下役人。ナフおとろしや。湯島の天神様柾采女にのりうつり。覚なき身を獄屋にくるしめ宝物をうばふ大悪人。一々に掴さかんと怒。訇あがり屋の。囲をめり〳〵押破て出（87ウ）て参る。御油断有ルなと云捨テて走行。

人々ふしぎと驚く中に杉は悲しき父が身のうへ。コレ三吉殿早ふいて鎮てと。身をもみ歎く透間もなく。又騒しくかけくる下部が申上ます。松竹梅の宝物を。盗ミし者共一人も生ケては置カじと。神主采女なんなく囲を打破リ候と。言上すれは俄に武兵衛太左衛門。覚有ル身の空恐しく歯の根も合ずふるひ出し。ナフ平太様。何いふも命が惜ひからの事。こりやまあ何ンとしませふと。おろ〳〵すれは平太ははつと赤面し。立んとするを髷掴ンで十内捻すへ。懐の一軸取て引出し。縁端よりはつしと蹴れは。白洲へどうど地響打てうごめくを。三吉かけ寄踏付〳〵。高手小手に禁しは心地よくこそ見へにけれ。

あがりやよりゆう〳〵と（88オ）立出る采女が風情。杉は見るよりヤアと、様かいの。お身にけさ、はなかつたかと三吉諸共尋れは。ホ、聟も娘も合点が行ゞまい。天満宮の此采女にのりうつり給ふとは。彼等に巧を白状させん十内殿の頓智ぞと。聞より平太はがみをなし。ヱ、残念や。松竹梅の神筆の失せたるは。源次兵衛親子が仕業にして罪に沈め。術を廻らし五松の家を断絶させ。時をはかつて神筆は某が尋出したと。禁庭へさし上ヶ武兵衛太左衛門を一廉の武士に取リ立んと思ひしに。斯顕れし奇怪さよと。二人ンも倶に身をもがけば。十内件ンの一軸を帕に包ンで恭〻〳〵しく押戴き。三人の者共が根深きたくみ。浅はかなる我術に落入しは。是偏に天神の御利生と覚たり。采女は湯島に立帰り。源次（88ウ）兵衛殿に京都の首尾宜ゞ頼申されよと。武功にほこらぬさしづに采女御神筆を受とれは。ホ、何から何迄十内殿の心づかひ。かゝる様子京都へ聞へなば。主人五松殿も嘸悦び。ア、いかにも〳〵。平太が罪科は追ての御沙汰。先ッ三人の縄付獄屋へひけと厳しき下知に雑人共。引立入れは源次兵衛。此上は一刻も早く上京仕らんと互ィの挨拶。采女をいたはり三吉夫婦打連へ皆々立帰る。

透をはかつて取次番白洲に出。本郷八百屋久兵衛夫婦。とくより腰掛に相待罷有ル。いかゞ仕らんと窺へは。ソレ〳〵是へ呼出せと仰を受て云ィ次にぞ。

夫婦打つれ牢の食。持ッ手もたゆくおづ〳〵と。掾先キに手をつかへ。娘お七が牢舎致した初メより。お願ィ申て（89オ）牢の食。毎日此母が持運ぶを。役人衆が取次で下さりますに。けふは何やら御用が有とて。夫婦共に御前迄召まするは。定メて娘をお助なされて。コレ〳〵嘸。恐おほい御前ンじや。つか〳〵と物いやるな。イヤ召まする御用は何か存ませぬが。

先ッさし当つて牢の食。早ふとらせたふござります。ホヽ其食物は最早持て帰れ。ヱヽイそりや何故でござります。ヲヽそち達も久々お預ヶの身と成リ。世間へ出ねは何ンにも様子はしらぬ筈。歎くを不便に思ひ本郷の町人共にも。深く包めと云付置しが。お七は三日以前より。両国橋昌平橋日本橋にさらされ。明クれは鈴の森に引出し。火罪に仰付らるゝと聞より夫（89ウ）婦は仰天し。ヱヽイそれはほんか悲しやと。うろ〳〵きよろ〳〵牢屋の方を打ながめては立つ居つ。かつはとふして正体も泣クより。外の事ぞなき。ホヽ歎くは理り。我レも不便さ助る筋も有ふかと。幾度も呼出し云訳せよと教れ共。いつとても替らぬ返答。吉三郎に逢ん為。自身に火を付たと潔白に云放せば。ぜひなく法に行ふ事。前世の業と明らめ歎キをとゞめよ去ながら。今生の対面もけふ限りなれは。暫時の間暇乞は赦す。それ〳〵お七を引出せ。畏ッて下部共牢屋へかけ行連出る。

むざんやお七は身の科のつゞまる命我ながら。けふを限リと白無垢に。かゝる禁あらけなく。しめ付られてたよ〳〵と。（90オ）顔得上ず泣居たる。

見るに悲しき両親は走リ寄てコリヤ娘。吉三殿に逢度クは。仕様模様も有リそな物。大それた事仕出したゆへ。わりやもふ死ヌる。火あぶりに成ルはいやい。ア、是親仁殿。たつた今わしに麁相いふなと叱リながら。つか〳〵と物いはしやる。大それた事仕出したとは娘じや有まい。はてなんぼせつない事が有共。我カ家を焼よふな無分別な事はせぬ筈。其日は嘉例の餅搗で。若も大勢いそがしさに。火を麁抹にかな。誰か仕業共しれぬを。お七でござると訴人したは。悪意地な武兵衛が業。そなたじや有まいの。サア。其覚ない事を。さつはりと云訳しやれは。今でも命助ふ（90ウ）とアレ。代官様がおつしやる

と。傍からくゝめる母のじひ。それとしる程猶悲しく。愚な事をいはしやんす。御詮義の抑より。吉三様ゝに逢ィたさに。私が火を付ましたと申上たに違ィはない。わしや嘘いふて身の科を。人におふせる気はないぞへ。それゆへ詮義はとふ済ゝで。橋々にさらさるれは。世間一まい人もしり。殺さるゝ今と成何程侘ても歎いても。お助なされふ筈もなければ。助かる心も更々なし。とはいひなから稚から一人リ娘と御寵愛。養育せられし親の恩。送る事こそ成まいけれ。責て一日半日もお心休る事もなく。かゝる歎キをかける事。わしや子ではない。魔王じや（91オ）鬼じや。憎いやつじやとお二人リに。お叱受るが罪亡し。必々逆なゑかうばし遊すなと。身の悲しさを押つゝみ親の歎を諫る程。二人リが胸をさく心地。ナフ其心根が猶いぢらしい。かふ成事と知たらば。親仁殿にさからふても。嫌やる武兵衛を聟にせふ共いふまいし。吉三殿を乞受て添そふ物を情なや。小家一軒立ふとて纔な金に義理立て。娘を殺す我々こそ親ではなふて前生の。敵と思へば我レながら。恨しいやらつらいやら有にあられぬ身の難義。遁るゝ筋はない事か。産落ると娘が名をお七と付ケたも。日比信ンずる七面ン様のお守リで。災難もない様にと頼をかけ（91ウ）たもむだ事か。お題目の功力はないか。番神様のお力で。助かる事はならぬかとくどき立〳〵声もおしまず。泣ければ。ハテ嚊愚痴な事いやるな。神仏のお力で。罪科が遁ふ物なら。悪作らぬ者も有まい。お仕置者もない筈。それ〳〵になした科未来の事は扨置キ。現世で報ふは針の先キ。遁ぬ証拠は今聞通リ。我と我手に火を付たと。いふが自業と思へは。おりやもふ泣もせぬ。悔もせぬ。さつはりと明らめて居るが血を分ケた親子の中。どちらでも殺さるれは御征法は立チそな物。成ふ事なら。あの娘が代リに立て。おりや死たいと心一ぱい胸一はい。せきかけ〳〵（92オ）せくりくる涙に声もむせかへれは。イヽヤこなたより此母が。先キへ死たい。殺されたい。生キ

てうきめが見ともない。お代官様頼ます。じひじや〳〵と手を合せ。拝つ侘つ身を悶泣さけ。ふこそ道理なれ。倶に哀と十内も目に持涙打はらひ。何程歎き悲しむ共。娘が罪科遁るゝ筋なし。況科なき汝等。代リに立ッ事思ひもよらず。叶ぬ諄時うつる早く立ていけ〳〵。御意じやきり〳〵立ませいと。声々に叱られて。アイ〳〵嘸。おりや足が痺たか。とうも爰が立にくい。ヲヽ痺レもせふ。腰も抜ふ。命乞が叶ぬ物。去ながら。今一つのお願イ。せめて娘が念ばらし。吉三殿を呼寄て。たつた一ト言暇乞が。アヽ是か、様。訳もない事いはしやんす。吉三様も此様子聞てなら。飛（92ウ）立ッ様に有ふが。前方の訳があれば。きびしい寺の云付で出られぬ筈。見へぬが結句わしが為なんぼ覚悟きはめても又顔見たら。未練な心が出よふ物。迷イの種じや。わしやいや〳〵。死ンだ跡では一遍のゑかうを頼ムと伝へてたべ。とはいふ物の例なき女の罪に大それた。我カ科我レと身をこがす。此世からのあび焦熱。うかむ世もなき未来の苦患。浅ましの身の果やと歎ク涙は紅の膝に血汐の渕なせば。夫婦は摺寄。にじり寄離がたなき恩愛の。思ひ尽せぬ憂涙身も浮計リ取乱し。前後ふかくに泣しづむは目もあて。られす哀也。既に其夜も明行ケは。警固の役人篠崎一平罷出。路次の用意馬廻り。地獄門の外トに（93オ）揃ひ候。科人ひかせ申さんと窺へは。それ〳〵急げと下知のした。縄取お七を引立る。マヽヽ待てくださりませと。とゞむる母は菩提樹の。数珠をかた見と取出し。娘が首にかけさすれは。父は朝夕読誦せし一部八巻法花経を。未来のみやげと懐へさし入るれはさしうつふき。手が叶はねば戴く心有リがたふござんすと。いふが此世の聞おさめ。夫婦は目もくれ心きへ。はてしなく〳〵取すがるを押のけつきのけ引て行。うしろすがたをふりかへり見返り。見をくる名残の袖。ひたすなみだの露の玉。もろくもきゆる憂命はかなや。悲し三重

（93ウ）

道行　浮名の八景

はだの小袖に。吉三とかきし。ぬひのもやうを身に。そへて。ふたり行クとは。思へ共。我レは。ひとりの。しでのたび。おぼつかなくも。よぶこ鳥のあはれ。なるかな。お七こそ。さい。恋路のやみのくらがりに。よしなき事を。しいだして。恋の罪科われひとり。かきあつめたる。玉ばゝき。あこがれこがれ行末は。かゝるうき身をこゝかしこ。見つけ。〳〵にさらされて。日本橋よりひかれゆく。見る人袖をしぼる人。見かへる人も皆人も。（94オ）やなぎはらのゝ。つくづしよそめにあまる涙川。わたりかねたるひのへむまふじの。けふりと。もろともに。きゆるいのちぞはかなけれ。くびにかけたる玉の緒のたへなはたへね母きゞの。かた見の念珠くりかへす守は父の給はりし。一部一くはん後の世を。たすけ給へやなむ妙。法れんげきやう南無めうほう蓮華経。いつしか君になれ馴染。かはるまいぞやかはらじときしやうを。書ィて取かはし。小ゆびを切リて。血をしぼり。互ィにかたるむつごとに。さりし御げんの夜ルの雨。とのごまつまの畳（94ウ）ざん。あふ夜あはぬの夜。いさようらみても。外カにあくしよは。せいもんとよあだあし。男の。あだ事や。ひんの盗に恋の歌三十一文字かきならひ。湯島にかけし松竹梅本郷お七としるしをく。十一さいの筆の跡見し人あらはわたくしが。形見と思ひ一ぺんの御ゑかう頼ミ奉ると。顔さし入るゝ懐の。内よりもるゝ振袖にたまる。涙ぞあはれなる。身は人くずと。いはゞいへ。笑はゝ笑へ一トすじに。思ひそめたる恋なれは。たとへ此身をつらぬかれ。ほねは粉となれ灰となれ。こんは（95オ）此世にとゞまりて。かげにつきそひ身にうつり二世もへ三世も我ッつまと。手に手をとりてれんげのり。のりのと

もづなきれはてゝ。我レと火に入ルなつのむし。こがれじにとは。此事か。竹の子ゆへに迷ふ親。めうがもしらず恩しらず。いかにわるめといへはとて。気まゝに心持なしてあられ。すくなきしめじとは神も仏もへしらま弓みつばよつばの。よめがはぎ。はぎもあらはに三田の郷。乱れし髪と諸共に。ずいきの涙おちこちの。ながめは爰もにほの海。さゞ波（95ウ）よする。品川や。い。よ。いよ。いよ。はま。あに。入江のあまおふね。見へつ隠れつ。一かすみのあれ。ゑから。さきを。見渡せは。よし原すゞめ口々に。とがのよしあし夕しぐれ。恋の邪魔する。男こそ。をいろのいのちのせたしゞみ。我レは仏になりもよし。ふりも。よしなやよ。いさよ恋ゆへに。いのちのとうげ。今しばし。しばしととむる人もなく。心も駒もせはしげに。行ク道しばも露ぞうく。ひくあしなみの数つきて。こゝぞ名にふる鈴の森さいご場ちかく。なりにける。（96オ）

△地吉三郎数多の人を押分ケ〳〵かけよるを。○詞ヤア何者と警固の武士押隔れは。情深き篠崎一平さなせそ者共。○詞くるしからず暇乞お仕やれと。赦す詞にナフお七。皆我レゆへに浅ましき其有様と。○歎けはお七は顔ふり上。○詞ヤア吉三様か。よふは爰迄きてくださんした。わしや生キなから火にやかれて。しぬるいまはの際迄も。おまへに逢ィたい〳〵の念がとゞいて。お顔を見たりや。思ひ残す事はなし。さはいふ物のと、様やかゝ様の。歎キの程がいとしひと。跡は詞もないじやくり。涙の白雨馬の背もひたす。計リに見へにける。ヲ、そなたにかはり此吉三。久兵衛殿御夫婦へ。随（96ウ）分孝行に仕へよと云置ィて。父源次兵衛殿は。御神筆を守まして早上京なされしが。我身に一つの願望あれば此通りと。みどりの黒髪切はらひお七が袂に押入るれは。○詞コレなふ申吉三様。先キだゝしやんしたお雛様や此お七が。菩提の為の御出家か。それ程やさしいお志。見てしぬれはわしが身は。此世からなる仏ぞや。

吉祥院で剃髪あらば。お七がぼだいと。御出家の身に浮名が立ッ。お雛様の御宗旨なれは。円乗寺のお弟子に成リ。此江戸の出口〳〵に六地蔵を。建立なされてくださんせ。ヲ、其遺言を立るは他力のすゝめ。法花天台元ト一つ。そなたのしるしは我カ住所にたて（97オ）おいて。跡ねんごろに吊はんといひ聞すれば。ア、有がたやと声をあげ。たがひの涙は末期の水。小石川の円乗寺に。今に朽せぬお七が墓。江戸の端々出口〳〵の。濡仏ヶと名に高きは吉三郎が建立也。時刻うつれは篠崎一平。それ〳〵お七が馬をやれと。したふ吉三をつきのけ〳〵。最期場さして追立ゆく。

吉三は跡に狂気のごとく。ヱ、思へは出家するも未練。おなじ冥途の道づれと。既にじがいと見へければ。久兵衛夫婦かけ来り。コレこなたか切腹めさつたとて。お七が命たすかりはせぬ程に。跡とむらふてくだされと。とゞむる所へおぢの十内（97ウ）三吉召つれ馳付ケてヤア〳〵吉三。悪事の張本平太は遠島。武兵衛太左衛門は獄屋にて打首と。菰に包ミし二ツの首を見せけれは。追々に上人阿闍梨。ぜひに女が命乞と最期場さしてかけ行給ふ。云伝へたるお七が生レは寛文六年。丙午の三月廿九日とや。誕生の月日をかへず。天和二年弥生の末の九日に。死するも不思議。吉三郎は特に近江の志賀の里。ぎずいと呼れ知識の誉。其名年ふる鈴の森。恋の緋桜引かへて。今染出しの江戸紫。栄へさかふる君が代の尽せぬ。恵ぞ目出たけれ。

延享元年甲子四月五日　作者連名　淺田一鳥／豊岡珍平／但見仙鶴（98オ）

与東国一見に向し時江戸小石川の円乗寺へ詣けるに八百やお七としるせし墓あり法号は妙栄信女天和二年壬戌三月廿九日今茲延享元年まで星霜六十三歳になんぬ昔の恋緋桜の緋を紫に潤色し其模様の煩多を刪其紋所の簡要を残古きを

種とし新く五巻に作東里の子産が余風を写し潤色江戸紫と簽し吟唱に備へふし〳〵をこめし竹の葉の散うせず浜の真砂のかず〳〵つきせぬためしならんかも

為永千蝶述（98ウ）

伝奇新腔製様扮戯末生旦浄扭浄
寓著木梗文像恭武像凛那活手飛
具託絃誦該貰伍齣付了笑楽院本
俺的詞曲者流凌傚之云耳
豊竹越前少掾
大阪心斎橋南四丁目西側正本屋
西澤九左衛門板（99オ）